魔法少女リリカルなのは……なのか？

蓬綱鉤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは……なのか？

【Ｎコード】
Ｎ８０３０Ｑ

【作者名】
蓬綱鉤

【あらすじ】
無限に広がる世界は、常に可能性に満ち溢れている。
→
何じゃそりゃ
キャラ崩壊に一様、警戒を。

絶対死亡フラグとしか思えないＥＺ☆　ｂｙ　魔理沙（前書き）

タイトル？深い意味はない。
思い付きで始めるただの？ですが、何か？
まあ、初心者なので、生暖かい白い目で見てください。
キャラを知っていても、ストーリーを知らない。場合によってはタイトルも知らない場合もあります

絶対死亡フラグとしか思えないＥＺ☆　ｂｙ　魔理沙

２０１０／１０／１８
ＡＭ００：００
ロシア連邦国
東シベリア海
ロング海峡
ウランゲル島
地下１８００ｍ
第一研究都市↑えっ？
第零総研究基地↑んん？
第四住宅地ＦｌａｐＫｕｒａｉｎ

どうも、霧島桜花（キリシマオウカ）です。職業は科学者と言う名の発明家&，私有艦隊司令官&新システム製造、新兵器製造、新エネルギー精製、新造艦製造等々扱う商人です。
えっ、可笑しいって？。まぁ、生きるためにやっていたら、いつの

間にか色々と作れるようになったので、製造しては大統領と武器商人に通しては売って、製造しては大統領と武器商人に通しては売って、の繰り返しをしてたらいつの間にか、財布には未使用のブラックカードが大量に入っていますよ。
えっ、正確に言えって?。嫌ですよめんどくさい。
ですけど……、はぁ、どうにかなりませんかねぇ?。この状況。

「とっとと消え去れよこのくそ爺ども!!。」

「そうだそうだ!!。」

「いや、だからとっとと帰れと言われても、こちらも仕事なので……。」

「知んわ!、帰れ!!。」

はぁ、山下さん、坂倉さんの二人は、誰であろうと容赦無いですね。一様、相手は神様ですよ。それも創造神ゼウス。まぁ遭遇初っ端から、《申し訳ないが、御主は本来居るべきではない人間なのだ。だから元の時代へ帰させてもらう。》って言われて問答無用で連れていかれそうになって、そこにあそびに来た山下さんと坂倉さんが、叩き伏せちゃったんですよねぇ。
で、そこから山下さんと坂倉さんが住み着いて居るんですよ。用心棒的な地位で。でも男ですけど。

コンコン

おや、誰か来たようだ。

「ウィンディル・ガーレイ博士。貴方にお会いしたいと願い出ている青年が居ますが、どういたします？。」

願ってもない好機です。ですが、青年とは？。まぁこの際、どうでもいいです。

「連れて来てください。」

「はっ少々お待ちを。直ぐに連れて来ます。」

さて、事態がある程度落ち着いた見たいですね。まぁ、一様、お客様なので。

「咲夜さん。お茶を八つお願いします。」

「解りました。」

何時もながら咲夜さんは凄いなぁ。知らない合間に現れては、すぐ消えるんですよ。まるでマジシャンみたいですよ。ただ、私は訳ありで雇って居るけどね。

「粗茶ですが、どうぞ。」一連の動作をみても、手慣れてますね。ホント凄いなぁ。

「あ、あぁ、有り難う。」

「有り難うございます。」

ゼウスは僅かながら驚いたけど、二人は見慣れているからなんの反応も無いですからね。

コンコン

「ウィンディル・ガーレイ博士、連れてまいりました。」

来たようですね。

「入りなさい。」

ガチャ

「よぉ、久し振りだな。」

「クライントさん?。何でここに?。」

紅黒い髪色にダークブルー色の目をしたイケメンと言う名の男の娘なんてクライントさんぐらいしか居ませんからね。ついでに言うと坂倉さん達は、未だにゼウス組とバトってますね。って、あれ?、何故か、寒気が。

「ここに居たか。馬鹿たれ共が。」

クライントさ〜ん?、なぜにゼウス達とお知り合い何ですか?。

「「「「あっ。」」」」

君達も知り合いなんですか?。

「クライント、すまないが、少し部屋を借りるぜ。」

逆らってはいけないと本能が叫んでいます。なので、さようなら。

「良いですよ。」（満遍な笑顔で）
「それじゃぁ」
「私達は」
「裏方の仕事があるので」
「さようなら。」

一寸の反論すらできない綺麗過ぎる言葉繋ぎで、即刻逃げ出しました。最後、何故か謀ったな、シャア！！っと言う台詞が聞こえましたけどスルーしましたよ。それと、私はシャアじゃありません。

一分後

「さて、今回は俺の本職に関わる話だ。心して聞いてくれ。破壊者。」

凄く、嫌な予感しか無い件について。神様ズはボロボロで外に放り出されてます。用心棒とメイドも外にいます。ですが、真顔でコードネームで言ってくるとゆう事は。私の本業、

「異次元世界に関する事ですね？。」

ブレイカーですね。

「その通りだ。飛ばす世界は魔法少女リリカルなのは、と呼ばれるアニメ世界でまるで木のように、本路（ホンロ）を中心に仮筋（カリスジ）や本筋（ホンスジ）が、数多に存在する。その内、謎の機関が仮筋を破壊し回っている。そこで、仮筋第６５４２世界に住む高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやての三名を重要人物として保護、プレシア・テスタロッサ、ジェイル・スカルエッティ、闇の書と呼ばれる夜天の魔導書の管理人格、リインフォースの三名を、最重要参考人として確保、また、その世界を襲撃した機関と時空管理局を撃破する。またはその世界を完全に本筋に変更、また、その世界に居るある人物、黒神天狼（クロガミテンロウ）に接触してもらいたい。その後はこちらで何とかする。ベストはその二つを達成することだが、未確認ながらメタルギアと超兵器反応が存在が認められている。場合によっては……、犠牲を払ってでも、その二つを撃滅してくれ。その世界には、あのオーバーテクノロジーは危険過ぎる。その世界所か、他の世界にも影響が現れる。最悪の場合、その世界を……、破壊しなければならない……。それだけは、避けたい。」

……それだけ、ヤバいのであれば、仕方ないですね。

「……、解りました。全力でやらせてもらいます。」

ガタン！！

「本当か！？。」

ちょ、近い、近いって。貴方は男ですけど、男の娘ですから道を誤ったら、私の精神と肉体が滅びますよ！？。無論、山下さん達に。（何故か）

「えっ、えぇ。本当です。ですから落ち着いてください。」

「あっ、すっ、すまない。」（照）

可愛らしいなぁ。でも、現実は非情だ。こんな可愛い子が男なんです。あぁ、殺気がビンビン飛んで来てますよ。あぁ、怖い怖い。常人なら余裕で死ねますよ。

「きゅ！？。」（ビク！）

……画面の外の人よ、目の前で、小動物を思わせる程の可愛らしく、怯えながら涙目になって居る姿を見たら、どう思いますか？。私は、越えてはならない壁を越えかけましたけど。…扉の隙間から、大量の赤い何かが流れてきましたね。かく言う私も危うい状態ですけどね。

「はっ！！。」

あっ。治った。

「取り乱してすまない。」

「いえいえ、大丈夫です。」

「……、そうか。」

……。やめて！。そんな顔をしないで！。私のライフはもう０よ！。

「破壊者、すまないが、早速その世界に向かってくれ。」

唐突過ぎるが何故に？。

「その世界にはイレギュラーが存在するが、その殆どが機関に加担している。無論、そのイレギュラーには何かしらの報酬を受け取っている。天狼も同じくイレギュラーだが、反時空管理局軍と呼ばれる３９８０個師団規模の超大軍団の元帥を勤めているらしい。」

それなんて超人よ。

「それに、イレギュラーが何をやらかすか、全くもって予測がつかないし、最悪、その世界が崩壊する可能性が高い。それゆえ、できうる限りイレギュラーを潰してもらいたい。最低でも三人は潰してくれ。時空管理局に関しては他の仮筋や本筋等に、侵略活動、盗賊紛いの行動を行っている事が解っている。これ以上の侵略活動の阻止の為、時空管理局の中枢を撃滅することが第一条件だ。解ったな？。」

はぁ、これは骨が折れますね。ですが、この依頼は私以外は無理だと踏んでここに来たのでしょうね。

「その依頼、必ず成功させてあげます。神々を束ねし王者、皇龍神（オウリュウシン）。

」

「頼むぞ。破壊者」

ガタッ

「それでは、失礼します。」

ガチャ

バタン

さて、咲夜さんは、っといましたね。

「咲夜さん。第一ドックに停泊中の超巨大次元跳躍戦艦、Ｃｒｏｗｎ・Ａｒｃｈｉｖｅ（クラウン・アーカイブ）の乗組員総員、第一、第二近衛中隊、第一～第六師団、全研究員を第一ドック、第零区域に集まるように伝えてください。後、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八ドックに停泊中の艦隊も出撃命令を出してください。残る艦隊は第一ドックに待機中の超巨大次元跳躍ドック戦艦、Ｆｏｕｌ・Ｕｎｄｅｒｇｒｏｕｎｄ（ファウル・アンダーグラウンド）と同型艦、Ｐｈｉｌａｄｅｌｐｈｉａ・Ｆｏｎｔ（フィラデルフィア・フォント）に他の艦を収容するように伝えてください。」

「解りました。直ぐに手配いたします。」

咲夜さん、パッと消えますよねぇ。何でも、時を止める程度の能力を使っているだそうですけど、絶対、程度の領域じゃないよね。でも、彼女が住んでいた場所では普通だそうですよ。あぁ、怖い怖い。

ブォォォォォン

ブォォォォォン

っと、このけたたましい音は、緊急戦闘配備の音か。例えるなら船の汽笛みたいに三、四秒鳴らして、一秒程、間を開けて又、鳴らすのを緊急戦闘配備。他には一秒鳴らして一秒置いて又一秒鳴らすのを緊急事態発生。二秒鳴らして一秒置いて又二秒鳴らすのが非常事態発生。とまぁ、こんな感じになってます。

『第一ドックに停泊中の超巨大次元跳躍戦艦、ＣＡの乗組員総員、第一、第二近衛中隊、第一～第六師団、全研究員は第一ドック、第零区域に集り、ＣＡに乗艦してください。第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八ドックに停泊中の艦隊は、急ぎ出撃準備をお願いします。残る艦隊は、第一ドックに待機中の超巨大次元跳躍ドック戦艦、ＦＵと同型艦、ＰＦに収容してください。尚、これはガーレイ総司令官の命令です。繰り返します。これはガーレイ総司令官の命令です。』

さて、さっさとＣＡ艦橋に向かいますか。

ＣＡ艦橋内

「ガーレイ総司令官。総員の乗艦、全艦隊の出撃まで残り１分程です。」

さすが、私が手塩に掛けた私兵ですね。ですが２時間１４分１２秒は遅いですね。最低でも２時間はきってもらいたいですね。まぁ、最初の頃と比べれば、はるかに早いですね。最初なんて、８時間以上もかかってましたからねぇ。

「解りました。乗艦が終了次第、出撃します。」

「了解！！。」

「出撃準備、整いました！。」

もう一分ですか。

「全ドック、天井解放！。」

『了解。全ドック、天井解放。』

ガコンッ
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

いつ見ても絶景ですね。まさにＳＦ！、ていう感じですね。あっ、後、今の声の人はＣＡの船魂をＡ．Ｉ．にしたんです。技術的には不可能なのですけど、不可能を可能ししてくれたのが、ロストテクノロジーです。まぁ、その辺の細かいことは後ほどで。

「都市は地殻へ収納。全パイプラインを地下都市へ繋げて注水。全ドックを１２００Ｍにまで上げてください。」

『了解。全パイプラインを海洋に接続。注水開始。第一、第二パイプラインを９８％まで解放。第三、第四パイプラインを３１％まで解放。第五、第六パイプラインを６１％まで解放。第七、第八パイプラインを７４％まで解放。第九、第十パイプラインを９９％まで解放。目標高度まで３分です』

優秀ですねぇ。時間的にはカップヌードルが作れるぐらいですけど。

「解りました。有り難う。フレイア。」

『お褒めの言葉、有り難うございます。』

「総司令官。下方の都市に海水の注水を確認いたしました。約２０分で都市が海の底に沈みます。」

「解りました。全艦、全機関を始動。目標高度到達と共に反重力シ

ステムを作動させ、艦の上角を９０度で固定。全速力で地上まで上がり、高度４６０Ｍまで浮上後、次元断層を経由、目標に侵入してください。」

「「「「了解！！。」」」」

『機関、完全に始動。反物質反応炉のエネルギー充填率１００％。目標高度に到達。反重力システム、作動。艦首を上方９０度にまで上げます。』

「総員、ベルト着用。」

ふむ、激しく嫌な予感がしますね。

『メインエンジン、サブエンジン、ブースターロケット始動、出力最大。』

ズゴゴゴゴゴゴ！

ぐっ、何時もながら、キツイです。急速的に速度が出ますからね。

『次元突破体制突入。全艦の時速、３６００ｋｍ。ブースターロケット、切り外します。』

ガゴン

うぉ、更に速く！？。

『次元断層に突入します。』

あ、もう無理ぽ。あぁ、目の前が暗くなっていく……。

絶対死亡フラグとしか思えないＥＺ☆　ｂｙ　魔理沙（後書き）

変な終わり方しちゃった

どうしてこうなった＼（＾Ｏ＾）／　ｂｙ　作者（前書き）

此処から、第三者視点で進みます。

どうしてこうなった＼（＾Ｏ＾）／　ｂｙ　作者

第３６７平行世界
仮筋第６５４２世界
２００６年／９月／１０日
ＰＭ１４：００
時空管理局管轄外
第９７世界『地球』
大日本帝国軍管轄内
神奈川県
鳴海市近辺
相模（サガミ）陸空海複合基地
第一ドック区域
第一海軍宿泊棟区
第四区域
第三陸海軍事棟
第二会議室

非常に細かい位置を教えてくれて有り難う。作者よ。だが長い。

此処、相模駐屯軍の会議室に、一般人と思わしき人物が六人、クロノ・ハオウラン、リンディ・ハオウラン、フェイト・テスタロッサ、高町なのは、ユーノ・クライシス、アルフ（ユーノとアルフは人の姿）が居たが、相当緊張しているようだ。彼等の反対側に座っている人物、大元帥の正装を着た人物と、その横に元帥の正装を着た人物、山本五十六と南雲忠一が圧倒的な威圧感を出しながら座っていた（第六天魔王の末裔と名乗っても可笑しくないぐらいの）。そして、彼等のその後ろに、大日本帝国軍の水兵服を着た兵士がたっていた。

「…これが、私達がこの世界にいる、理由です。」

そう言って座ったのはクロノだ。それを聞いた大元帥はこう言った。

「ふむ、つまり、君達時空管理局という、巨大な組織は次元干渉型ロストギア、ジェイルシードと、行方不明者のユーノ・クライシスを探してここに来た。」

大元帥の言葉を聞いて、クロノとリンディは頷いた。それを見て、次になのはに顔を向けた。

「それに、高町なのはは、クライシス一族が持つ次元航行艦なる輸送船で運送中、何者かに襲われて、その際に落ちたジェイルシードを集めるユーノと共に手伝っている。」

なのはは慌てながらも、その質問に元気よく返事をした。それを見て微笑ましく感じた大元帥（見た目は無表情だが）は、フェイトとアルフに顔を向けた。

「そして、フェイト・テスタロッサは、使い魔のアルフを連れて、母親の為にジェイルシードを集めている。と、言う訳か。」

フェイトとアルフは、その通りです、と丁寧に行った。

「成る程。そして、最後のジェイルシード六個を回収した直後、我々、三個機動艦隊と、相模陸空海複合基地から出撃した航空隊に拿捕されて、ここに連れてこられた。と、言う事か。」

大元帥がそう言った事に、クロノはこう言った。

「その通りです。そして、我々は本来ならば、貴方方々とは、干渉

する事は禁じられています。が、一つ聞きたいことが有ります。」
クロノが言った事に、大元帥はこう言った。
「ふむ、許可しよう。」
それを聞いたクロノは、待ってました、と、言わんばかりにこう言った。
「何故、我々の存在が解ったのですか?。」
クロノのその質問に、大元帥は少し悩み、こう言った。
「数週間程前に強大な魔力を察知したと、報告があってな。その際、人口衛星等を使って、君達を監視させてもらったよ。」
それを聞いたクロノとリンディは疑問を感じた。魔力を感知したと言う事は、この軍事基地に自分達と同じ魔導師が居る。と言うことになるのだ。それに悩む二人。そこに、ユーノがこう言った。
「魔力を感知した、というのはどうゆう事ですか?。」
ユーノは二人と同じ様に魔力を感知した事に疑惑を抱き、大元帥に聞いた。それを聞いたクロノとリンディはよくやった!!、と内心で思いガッツポーズを心の中でやり、大元帥に目を向けたが、なぜか、大元帥と山本、南雲元帥は遠い目で懐かしい思い出を思い出すような感じだった。すると、大元帥がこう言った。
「過去に、とんでもない奴らが宇宙の外から侵略してきてね。その際、彼等の兵士達が空と陸とで、魔法を使ってきたのでな。そのおかげで、通常のレーダーじゃ、対応出来なくなり、全方位を監視兵

を配備せざるおえなくなってしまったのでね。その対策に、魔力に反応できるレーダーを作ったのだ。解ってくれたかね？。」

大元帥のその言葉を聞いて、リンディとクロノはなるほど。と思い、ユーノは、凄いですね、ありがとうございます。と礼を言った。大元帥達は苦笑いをして、別に良いんだけれどもね、別に。と言った。すると、突如として、けたたましいサイレンが基地全体に鳴り響いた。そして館内放送が流れた。

《本基地から南々東３．８ｋｍ地点に、未確認超エネルギー反応を観測！！。数、１４３！。内三つは莫大な超エネルギー反応有り！！。全て計測不能！！。繰り返す！。本基地から南々東３．８ｋｍ地点に、未確認超エネルギー反応有り！！。》

大元帥や山本元帥達は即座に立ち上がり、兵士に対し、大元帥が真剣な顔付きでこう言った。

「彼等を第一司令塔に案内しろ。」

そう言った後、大元帥達は部屋から出た。兵士達は敬礼した後、クロノ達を連れて第一司令塔に案内した。

同世界
ＰＭ１４：２２
同区域
第一司令塔室
最上階
作戦本部

クロノ達は兵士達に、作戦本部の部屋の前に連れて来られた。そして、その扉を開けたら、先程会った大元帥と山本元帥と南雲元帥が居た。だが、彼等は本当に先程見た人なのか疑いたくなる程の鋭い目付きをしていて、部屋の空気は余りにも緊迫した雰囲気であった。すると、通信兵を示す階級を着けた兵士がこう言った

「白牙大元帥様、第一、第二、第三、第四機動艦隊と第一、第二、第三本土防衛艦隊が目標地点に到達しました。尚、出撃した艦隊から航空機の増援要請が来ています。」

それを聞いた大元帥こと、白牙銀麗（ハクガギンレイ）は通信兵にこう言った。

「わかった。通信兵、増援の航空隊の要請として、本基地と近辺航空基地から、出撃命令を出してくれ。」

通信兵は、了解！。と言って通信機に向かった。すると、白牙大元帥はクロノ達に向き、こう言った。

「ようこそ。魔導師の諸君。血で血を洗う最悪の大戦を生き残った、魔の巣くう国へ。」

その眼は、冷酷で、心の奥底を見るような、眼であった。

第一本土防衛艦隊
旗艦
高雄型巡洋戦艦
高雄

「艦長、目標海域に到達しました。」

そう言って、敬礼した兵士は、少将の階級兵であった。艦長と呼ばれた中将はこう言った。

「うむ、総員、戦闘配置に着け。」

艦長のその言葉を繰り返すように、こう言った。

「総員、戦闘配置に着け！。」

すると、艦内でバタバタと水兵が動き始め、僅か三十秒で配備についた。だが、レーダーを担当していた兵士が、叫ぶようにこう言った。

「目標海域にて超エネルギーが急速に低下、変わりに質量エネルギーが急速に上昇！！。１９８０事変と同じです！！。」

その報告に、そこにいた全員が声にならないほどに驚愕した。
すると、艦隊前方に歪みが表れ、その歪みの中心からブラックホールを彷彿させる何かが出来、その何かは、急速に膨れ上がり、その中から、数多の軍艦らしき艦が艦首部分のみ表れた。
そのうちの二割は、最初に出てきた艦隊だが、残る八割は、見たことも無い近未来的艦隊だった。
だが、その何かが張っている膜らしき何かが、艦隊が外部に出る事を、意図的に塞いでいるかようだが、その膜は呆気なく破られ、艦隊は何かから抜け出した。その後、艦隊は水平に保ち、空中で固定された。空中で固定された艦隊の中、非常に目立つ艦が一隻、存在していた。その艦は非常に巨大で、桜花が率いる巨大艦よりも遥かに大きく、全長だけでも１６ｋｍ以上あった。その艦がいるだけで、周りの艦艇は蟻に見えてしまうほどの大きさだった。

「艦長！。」

「この事を相模軍本部に報告しろ！！。艦隊はスクランブル警報を鳴らし、浮遊艦隊の行動に警戒せよ！。空母は全航空機を出せ！！。攻撃機、爆撃機、戦闘機全部だ！！。それと戦艦艦隊、イージス艦隊の増援も軍本部に要請しろ！！。急げ！！。」

そう言い切った直後、艦隊全体に警報が鳴り響き、すぐ近くの空母から艦載機、Ｓｕ－２９が表れ、カタパルトに搭載されて、即座に射出された。他にも、Ｓｕ－３７や、Ｆ－２２、Ｆ－１５、Ｆ－１４Ｄ、Ｆ－１４Ｅ、Ｂ－５、Ｘ－３５等の機体が他艦から発艦した。
空母の艦載機だけで５０００機以上の航空機が発艦されたのだ。
すると、通信兵がこう言った。

「艦長、相模軍本部から報告。レミリア元帥、フランドール副元帥、十六夜大将、ノーレッジ大将以下、四名の戦艦隊と、山本元帥、南雲元帥、真田元帥、ハルゼー元帥、西行寺元帥以下、五名のイージス艦隊を派遣する。到達まで三分かかるとのこと！。」

それを聞いた中将はこう言った。

「元帥格が六人も！。解った。我が艦隊は未確認艦隊とコンタクトを取る。攻撃があれば、我々は未確認艦隊との交戦、現状を死守すると、軍本部に。」

それを聞いた通信兵は、こう言った。

「了解！。」

そして、中将は寄り掛かり、こう言った。

「秋風、未確認艦隊をすべてハッキングしてくれ。監視カメラがあれば、それを乗っ取ってモニターに写してくれ。」

すると、秋風と呼ばれた兵士、少佐の階級を証すバッチを着けている人が言った。

「アイ、サー！。ハッキングには３０分程かかりますが？。」

秋風のその言葉に、中将はこう言った。

「構わん。やってくれ。」

中将のその言葉に、秋風は敬礼し、画面に向かい合うと、物凄い勢いでキーボードを打ちはじめた。手がまるで三十本あるように見えるほどに早いスピードで打ち込んでいる。
すると、通信兵がこう言った。

「艦長、未確認艦隊の大型艦から発光信号。『こちら、ウィルヘル連合軍、地球連邦軍、日本第三艦隊旗艦所属、愛宕。貴艦隊の所属を名乗ってください。』だそうです。」

それを聞いた中将は、疑問を持ちながら通信兵に、こう言った。

「丁寧な言い草だな。しかし、ウィルヘル連合軍？聞いたこと無いな。通信兵、発光信号でこう伝えろ。『我、第一本土防衛艦隊旗艦、高雄、貴艦隊は、我々大日本帝国軍の領土内に侵入している。直ちに領土内から退去せよ。』と、な。」

通信兵は敬礼し、艦橋左方にある目測所に向かった。
すると、秋風がこう言った。

「艦長、一部の艦艇を除き、全艦艇のハッキングに成功しました。」

それを聞いた中将は秋風にこう言った。

「一部の艦艇？。ハッキングに失敗したのか？。」

その質問に秋風はこう言った。

「巨大艦二隻と、八十隻程の戦艦には、未知と言える程に固いプロテクトが、かかってました。パスワードの解読するだけでも一週間はかかります。」

それを聞いた周りの人は驚いた。なぜなら、秋風は世界一とうたたわれる程のハッキング能力を持っていており、この世界にある世界最高のプロテクトすら、僅か五秒で看破するほどの腕前を持っているのだ。現実世界の世界最高のプロテクトではコンマで叩き伏せられる程の凄腕である。
そんな人が一週間かかるということは、桁違いのプロテクトがかかっている。と言うことだ。他の人ならゆうに二、三世紀かかる程のプロテクトがかかっている。そういう事になる。つまり、ハッキングに失敗した巨大艦二隻と戦艦八十隻の艦隊は、それ程までにプロテクトが固いシステムだと、言うことになる。
二度目だが、話を戻そう。
中将は少し悩み、秋風にこう質問した。

「秋風、それが本当なら、その艦隊は警戒に値する程の艦隊、と言うことになるのだな？。」

秋風はその質問に頷いた。中将は、ふむ、と、僅かに唸り、悩んだ。すると通信兵がこう言った。

「艦長、増援艦隊が到達しました。元帥格の方々から、命令が下りました。『指揮権を目下、未確認艦隊を警戒する第一本土防衛艦隊司令の、暁中将に任命する。』とのこと。」

それを聞いた中将、暁蓮（アカツキレン）は口を引き攣らせた。いきなり重役を任せられたら、誰だってこうなるだろう。

「仕方ない、か。」

そう言って蓮は椅子に座った。すると、先程発光信号をしていた兵

士が来て、こう言った。

「艦長、ウィルヘル連合軍なる艦隊は入港を求めています。」

兵士の報告を聞き、蓮はこう言った。

「念のため、ウィルヘル艦隊の編成を聞いてくれ。それで入港を決める。」

兵士は敬礼し、もう一度、艦橋横に戻った。

「ふぅ、何も起きなければ、良いんだがな。」

そう言って、蓮は少し帽子を深く被り直した。

どうしてこうなった＼（＾Ｏ＾）／ ｂｙ 作者（後書き）

どうしてこうなった！！

何が何だかまったく以って解らない。これ常識　ｂｙ　チルノ（前書き）

ＭＡＷＥＣＬＳが出た場合、人物の詳細の行動が書きたくも書けない、と言うより情報網が混線なので、頑張って戦況を書く感じです

何が何だかまったく以って解らない。これ常識　ｂｙ　チルノ

未確認艦隊と本土防衛艦隊＆機動艦隊から南方に２０ｋｍ、深度１２００ｍ地点
北方国際連合同盟軍所属
ソビエト連邦共和国所属
第八艦隊
第二潜水艦隊
第六特殊分艦隊
第一特殊分隊
旗艦
ニコライ・カプルーノフ

第一、第二、第三、第四機動艦隊と第一、第二、第三本土防衛艦隊から南方に２０ｋｍ離れ、１．２ｋｍの深度に一隻の潜水艦がいた。その潜水艦の名はニコライ・カプルーノフ。形状は戦闘機、Ｓｕ－４７と呼ばれる機体に似ており、それを巨大化させた感じである。全長は２５８ｍ、全幅１２８ｍ、全高４４ｍと戦艦並のでかさを有する潜水艦である。艦橋は戦闘機に置けるコックピットの位置の場所にあり、滑らかな傾斜地点に埋め込まれる形になっている。これは主に艦橋の被弾における指揮系統の損耗を抑える目的でこのような形である。そんな潜水艦、ニコライ・カプルーノフの艦橋の中は明らかに近未来的設計を彷彿させる形状で、艦橋の前方の右から火器管制コントロールパネル、射撃管制コントロールパネル、通信管制コントロールパネルの三つがあり、艦橋の右側はダメージコントロール管制パネルがあり、左側はレーダー、ソナー、航路管制パネルがある。最後に艦長席の前に艦体操舵制御装置がある

「艦長。極東の奴らが未確認の飛行艦隊と接触しました。」

そう言った人物は肌が白く、金髪に紅い眼をし、鋭い眼をしており、凛々しさを感じさせる女性だ。そして、艦長と呼ばれた人物は菫色の髪に肌が白く、眼は蒼色だが、左目は眼帯をしていた。

「そうか。副長、引き続き監視を続けろ。」

艦長は副長にそう言った。副長と呼ばれた金髪の人は右手で敬礼し、艦長の左にある椅子に座り、潜望鏡を覗いた。

「しかし、まさか人が空を飛ぶとは、驚きですね。」

潜望鏡を見ながら、副長はそう言った。それを聞いた艦長は、遠い眼で言った。

「確かに、創製軍の再来を彷彿させるが、まだマシの方だろう?。１９１４年の第一次世界大戦や１９３９年の第二次世界大戦、１９５０大事変や１９６１大事変、１９６４、１９６６、１９６９、１９７６、１９８０事変の様な世界存亡の間近に何度も立ち会ってしまえば、可愛く感じるがな。思えば、種族多様化になったのは１９３９年の第二次世界大戦だったな。」

そう言って、艦長は眼をつぶった。副長は艦長の方に顔を向き、首を傾げた。だが、直ぐに潜望鏡を覗いた。すると、艦長が座っている席から左側の手前に座っている銀髪の人物は立ち上がり、ヘッドホンを取ってから振り向き、言った。

「艦長、パッシブ・ソナーに反応、艦艇の音からして、大日本帝国軍潜水艦と思われます。また、水上に大規模の増援艦隊を確認しました。指示を。」

そう言った銀髪の人物は、少年の様な姿をした少女で、眼の色が蒼く、肌の色は白い色だ。

「大日本帝国軍の潜水艦?。ザウネン二等兵、その潜水艦の深度は解るか?。」

艦長はそう言い、ザウネン二等兵、エルカ・ザウネンは少し待ってください。っと言い、ヘッドホンを付けた。そして2、３０秒経つと突然ヘッドホンを取り、叫ぶように言った。

「潜水艦から注水音を確認しました！。」

それを聞いた艦長は即座に叫んだ。

「アクティブソナー稼動！。原子力機関稼動！。メインバラストを解放して緊急浮上！。囮機雷を放出しろ！！。」

艦長がそう言うと共にニコライ・カプルーノフの機関が稼動し、二対のスクリューが唸り、急速的に回転し、艦体のあちこちから重しとなっていた海水が放出された。さらに、ニコライの艦尾側から幾つかの球体が放出され、ニコライは航行と浮上を始めた。その数秒後、大日本帝国軍潜水艦と思わしき潜水艦から射出された魚雷はニコライが放出した囮機雷に当たり、爆発した。その衝撃波を推進力にニコライは加速、急速に浮上しはじめた。そしてニコライは深度２５０ｍに到達するとともに海水の放出を停止した。ただし、浮上時の勢いが凄く、２２０ｍまで浮上したがそこで完全に停止した。艦の完全停止を確認した艦長はダメージコントロール管制パネルのまえに座っている菫色の女性に言った。

「ノッテンベルク少尉、被害報告をしてくれ。」

ノッテンベルクと呼ばれた菫色の女性、マリノ・ノッテンベルクは立ち上がり、艦長の方に振り向いた後、言った。

「本艦の被害は軽微、爆発の影響で艦に若干の歪みが出たようですが支障はありません。」

マリノはそう言いきった後、艦長に敬礼し、座った。艦長はほっとし、体を少しばかり椅子に預けた。すると、通信管制パネルの前に座っているエメラルドグリーン色のショートボブでカールの髪をし

た少女が言った。

「艦長、機関室から報告が来ました。」

艦長はそれを聞き、言った。

「ドク一等兵、読んでくれ。」

ドク一等兵と呼ばれた少女、ドナ・ドクは敬礼し、言った。

「はい。機関に異常発生、出力が７６％ダウン。最大出力は２４％までしか出せないそうです。急激な稼動に耐え切れず、早急に部品の取り替えが必要、とのこと。」

艦長は、そうか……。っと言い、眼を閉じ、考えはじめた。そして、艦内は無言となった。

１０分前

大日本帝国領土

「暁艦長、我が帝国軍潜水艦に似た潜水艦が南方２０ｋｍを航行中です。」

そう言ったのはソナーを担当していた兵士だ。

「規模は?。」

蓮はソナーを担当している兵にそう聞いた。

「一隻のみです。」

ソナー兵はそう言った。蓮は考え、命令を下そうとしたがソナー兵が突如として言った。

「ちょっと待ってください。所属不明艦から注水音を確認！。それと同時に新たな潜水艦を感知！。ソビエト連邦共和国の潜水艦です！！。」

それを聞いた蓮は顔を歪めた。すると、ソナー兵の後ろにいた兵士が突然、言った。

「艦長！、本艦隊から３５ｋｍ地点に大規模の潜水艦隊を捕捉！。数、２０万隻です！！」

それを聞いた回りの人間は驚いた。蓮はその言葉にこう言った。

「それは誤報では無いのか？。」

それを聞いた兵士は首を横に振った。

「艦長！！。皇帝陛下から連絡！。『緊急伝達。本国に接近中の未確認艦隊、創製軍が再出現。これを全力で撃退、または撃滅せよ。尚、本作戦に撤退は許されない。繰り返す、創製軍を全力で撃退、または撃滅せよ。撤退は許されない』とのこと！！。」

それを聞いた蓮は絶望した。それもそうだ。逃げることが出来ないと言うことは、最悪玉砕してでも何とかしろと言うことだ。それだ

け脅威だと言う事が見て取れる。
すると、レーダーを担当していた兵士が突如として叫んだ。
「大規模潜水艦隊から対艦ミサイル発射を確認！！。数は……、計測不能！！。」
「ＭＡＷＥＣＬＳ（Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ａｆｆａｉｒｓ　Ｗｉｒｅｌｅｓｓ　Ｅｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ　Ｃｒｏｓｓｅｄ　Ｌｉｎｅ　Ｓｙｓｔｅｍ、軍事無線強制混線システム）を稼動！！。ヘラクレスシステム始動！！目標は対艦ミサイル！。対空ミサイルＶＬＳ（Ｖｅｒｔｉｃａｌ　Ｌａｕｎｃｈｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ、バーティカル　ランチング　システム）、ＳＡＭ（ｓｕｒｆａｃｅ－ｔｏ－ａｉｒ　ｍｉｓｓｉｌｅ／ｓｅａ－ｔｏ－ａｉｒ　ｍｉｓｓｌｅ／ｓｈｉｐ－ｔｏ－ａｉｒ－ｍｉｓｓｉｌｅ　艦対空ミサイル）、ＣＩＷＳ（シウス、もしくはシーウス，　Ｃｌｏｓｅ　ｉｎ　Ｗｅａｐｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ）をフルに稼動しろ！！。無限装填装置、自動装填装置、ＥＣＭ（Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃ　Ｃｏｕｎｔｅｒ　Ｍｅａｓｕｒｅｓ＝エレクトリック・カウンター・メージャーズ、電子攻撃手段）、ＥＣＣＭ（Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃ　Ｃｏｕｎｔｅｒ－Ｃｏｕｎｔｅｒ　Ｍｅａｓｕｒｅｓ、対電子妨害手段）装置、ＲＲＳＳを起動（Ｒｅｃｉｐｒｏｃａｌ　Ｒｅｃｏｒｄ　Ｓｈａｒｅ　Ｓｙｓｔｅｍ、相互データ共有システム）！、対艦ミサイル迎撃に総力を上げろ！！！。」
そう言ったと同時に、高雄や回りの艦艇、あまつさえ空母の甲板から可笑し過ぎる数の対空ミサイルが尾を引きながら発射され、２、３００ｍまで上り、対艦ミサイルに向かって行った。
目視出来る分だけで５０万は下らないだろう。そして、明るい空に、数多の太陽が出来た。
「こちら、ウイング。対艦ミサイルの総てが迎撃された」
「何？！」

「あれだけのミサイルを打ち落としただと？！」
「司令部の馬鹿野郎！！、何処が簡単なんだ！」
「こちら相模ＨＱ、敵創製軍潜水艦隊の無線から位置を捕捉に成功した。それと量産型超兵器、ドーラ・ヒルド、エクスキャリバーの準備も整った。奴らを海面に引きずり出せ！！」
「了解。全艦、ＡＳＲＯＳミサイル、発射（Ａｎｔｉ　Ｓｕｂｍａｒｉｎｅ　ＲＯＣｋｅｔ、ＡＳＲＯＣ　アスロック）！！」
すると、大日本帝国軍の艦艇から空を覆うかの如くＡＳＲＯＣが射出された。
「大日本帝国軍、ＡＳＲＯＣの発射を確認！」
「囮機雷を放出しろ！！」
「着弾まで３、２、１、着弾、今！！」
そして、海面に明らかに可笑しい数の水柱が上がった
「回避成功！」
「くそ、通信が入れ乱れてやがる！」
「対艦ミサイル、目標、ウィルヘル軍、波状攻撃開始！！」
「敵艦隊、対艦ミサイル発射！！」
「対空ミサイルＶＬＳ発射！！。ＣＩＷＳとＳＡＭは何時でも撃てるようにしとけよ！！」
「早期警戒管制機（Ａｉｒｂｏｒｎｅ　Ｗａｒｎｉｎｇ　Ａｎｄ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｓｙｓｔｅｍ，　ＡＷＡＣＳ）、こちら相模ＨＱ、エクスキャリバー発射を要請する！」
「こちら早期警戒管制機スカイ・アイ。受理した。目標は？」
「対艦ミサイルだ！！。急いでくれ！！」
「こちらＣＩＣ　（Ｃｏｍｂａｔ　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒ、戦闘指揮所）第三波を確認。第四波の発射も確認した！！。急ぎ第二波対艦ミサイルを撃ち落とせ！！」
「ＣＩＣ、無茶言うな！！」
空から数多のレーザーが降り注ぎ、対艦ミサイルを貫いたと共に爆発、一瞬で回りの対艦ミサイルを巻き込んで小さな太陽を大量に作

った
「第二波対艦ミサイル壊滅！！」
「グラーフ・スペリオルはまだなのか！？」
「グラーフ・スペリオル到達まで、残り３０分だ。それまで持ちこたえろ」
「ウィルヘル連合軍を相模基地に後退するように言え、手段は問わない！！」
「第三波対艦ミサイル群接近！！ＳＡＭの射程圏まで残り五秒！！」
「エクスキャリバーはどうなっている！！」
「敵創製軍潜水艦隊の中心部に戦艦級潜水艦を捕捉」
「これがミサイルの嵐ってか」
「ＳＡＭ、ＣＩＷＳ、フルオートで射撃開始！！」
そう言うや否や、ＣＩＷＳはチェーンソーのような音で唸り、ＳＡＭは発射基が煙りで見えなくなるほどの数で一気に掃射された。
「艦船識別完了。なっ、シンファクシ級潜水空母！！。数は……、そんな馬鹿な！。数は１０万隻！！」
「なに！。奴ら、いつの間にそれだけの数をかき集めたんだ！！」
「シンファクシ級艦隊、散弾ミサイル発射！！」
「エクスキャリバーに散弾ミサイルを撃ち落とす様に言ってくれ！！」
「こちら厚木基地第六陸軍所属第６２８６師団。パトリオット・ミサイル、移動式レールガン戦車隊の発射準備が完了した！！」
「６２８６師団、散弾ミサイルの数を減らしてくれ！！」
「散弾ミサイル、着弾まで１０、９、８、７、６、５……」
「散弾ミサイルが落とされた！！」
「大丈夫だ。前面だけだ」
「エクスキャリバー発射を確認！！」
新たに空から光が注ぎ、散弾ミサイルを殲滅した。
「こちらウイング！、散弾ミサイル壊滅！！」
「くそ、グラーフ・スペリオル、早く来てくれ！！」

「こちらスカイ・アイ。潜水艦隊後方５０ｋｍから第二次艦隊接近」
「奴らの増援か！！」
突如、第二次創製軍増援艦隊から一本の光が空に放たれた。
「こちら相模ＨＱ！！。エクスキャリバーが落とされた！！」
「なに！？」
「おいおい、マジかよ」
「グラーフ・スペリオルだ！！。グラーフ・スペリオルが来たんだ！！」
「よし！！。この戦い、勝てるぞ！！」
「全艦浮上！！。奴らを叩き伏せろ！！。そして、本来あるべき世界に変えるのだ！！！」
「敵創製軍潜水艦隊、浮上を確認」
「ドーラ・ヒルド隊、射撃開始！！」
「こちら、アメリカ合衆国第六艦隊。大日本帝国軍に加勢する！！」
「同じく第七艦隊。大日本帝国軍に加勢する！！」
「こちら国連第十三対超兵器独立艦隊。戦闘を開始する！」
「同じく第一対超兵器独立艦隊。大日本帝国軍に加勢する」
「敵艦隊の増援を確認。四個艦隊だ」
「厄介な奴らが現れたな」
すると、潜水艦隊の間近に数多の水柱があがった。
「なっ、なんだ！！。何が起きてる！！」
「攻撃型原子力潜水艦リバティー、タイコンデロガ、トライデント、ミーズリア、ファースト被弾！！、轟沈！！」
「シンファクシ級潜水空母、シンファクシ、リムファクシ、アーマガ、フライ、スカイブルー、デイラント、ディンスライト、ブルーストライク、ファンディーライト、フィンストグレイ被弾！！。全艦大破！！」
「総員退艦せよ！！」
「被弾したシンファクシ級潜水空母から水兵が退艦中」
「くそ！！。輸送潜水艦、急いで漂流兵を回収してくれ！！」

「全艦、装填出来る高機動対地ミサイルを後方の基地に叩き込め！！。仕返しだ！！」
浮上した潜水艦隊の中央から後部までのＶＬＳが稼動し、現代じゃ考えられない程の対地ミサイルが尾を引きながら発射された。
「対地ミサイル接近中！！。目標は後方の基地だ！！。急ぎ撃ち落とせ！！」
「一発たりとも通させない。絶対に。」
「こちら、６２８６師団。援護する！」
「こちら第一対超兵器独立艦隊。対地ミサイル迎撃を援護する！！」
そう言うや否や、東から接近していた艦隊から対空ミサイルが放たれた。また、大日本帝国方面からレールガンと地対空長距離ミサイルが放たれた。
「ミサイル、３２％の迎撃を確認。まだ来るぞ。気をつけろよ」
「なんて機動だ！！。あれは本当に対地ミサイルなのか？！」
「絶対防空ライン、突破まで残り十秒！！」
「くそ、突破される！！」
「対地ミサイル、絶対防空ライン突破まで残り５秒！！。４、３、２、１。対地ミサイル、絶対防空ラインを１２％が突破！！数にして５０００発だ！！」
「くそ！！。６２８６、頼んだぞ！！」
「任された！！。全力で落とすぞ！！」
そう言ったと共に、陸地からの対空ミサイルとレールガンが、嵐の如くに発射された。
「対地ミサイルは一気に迎撃された！。残り３０発だ！！」
「くそ、残りの対地ミサイルが異常だ！！。迎撃が間に合わん！！」
「対地ミサイル、４発が基地に侵入！！」
そう言うや否や、対地ミサイルの一発は燃料タンクに当たり、大爆発し、滑走路、管制塔、格納庫を巻き込んだ。二発目は湾内にたまたまいた油送船当たり、爆発。回りの油送船も巻き込んだ。三発目は燃料切れで発進準備中の攻撃機に当たり、爆発。その時、燃料を

入れていたため火がタンクローリに引火、爆発した。最後の一発は時空管理局の巡視艦、Ｌ級次元航行船、アースラの左舷艦尾に被弾。爆発した。
「時空管理局艦艇に被弾！。被害甚大！！」
「死にたくなかったら退艦しろ！！。急げ！！」
「総員退艦！！。総員退艦！！」
「クソッタレが！！」
「なんだ、今のミサイルは！！。こっちのレーダーには写らなかったぞ！！」
「やったぞ！！」
「電子妨害が効いたんだ！！」
「こちら、スカイ・アイ。高度３００００フィートで飛行中の機体を多数捕捉した。恐らく、電子戦機群と思われる。カースト隊、ガーゴイル隊、ウォードック隊、エコー隊、ガルム隊、メビウスは電子戦機群を撃破せよ！。」
「こちらエルフェル。了解した！！」
「デイリー了解」
「ガーゴイル１、了解」
「ガーゴイル２、了解！」
「ハートブレイク１、了解」
「ブレイズ、了解」
「エッジ、了解」
「チョッパー了解！」
「グリム、了解！」
「スノー、了解」
「エコー１了解」
「エコー２了解」
「ガルム１、了解した。急行する」
「ガルム２、了解！」
「ガルム３、了解」

「メビウス１、了解」
そう言うや否や、Ｆ－４ＧやＸ－０２、Ｆ－１４Ｄ、Ｆ－１５Ｆ、Ｆ／Ａ－２２Ａ、Ｆ－１６、Ｍｉｇ－３１、Ｓｕ－２７、Ｓｕ－３５、Ｓｕ－３７、モルガン、Ｆ－３５、Ｓ－３７、Ｍｉｇ－２９Ｘ－２９Ａ、Ｓｕ－４７などが急速に上昇して行った。
「スカイ・アイ、敵増援艦隊はどのような編成だ？。」
「ちょっとまて。」
「こちら１６９２４隊、目標を確保した！。作戦成功！。繰り返す。作戦成功！」
「了解。イプシロン、彼等の回収を急げ！。」
「こちら、スカイ・アイ。敵増援艦隊の編成が解った。艦隊中央に巨大なレーザー砲を積んだ超兵器艦だ。超兵器艦の周辺には対空砲で固められた空母と駆逐艦がいる」
「こちら、呉海軍造船基地！！。敵潜水艦が現れた！！。現在迎撃中だが戦力が足りない！！。至急増援を！！。」
「こちら国連第一対超兵器独立艦隊。現場に向かう。許可を」
「こちら相模ＨＱ、許可する！。急ぎ向かってくれ！」
「急げ、時間は待ってくれないぞ！」
「スカイ・アイ。情報提供感謝する」
「何をするつもりだ！。スカイドラゴン！」
「これより敵潜水艦隊に攻撃を仕掛ける。来る奴はついて来い！！」
「こちらナイトメア。面白そうだな。スカイドラゴンに従属する！」
「こちらアルテミア。同じくスカイドラゴンに従属する！」
「こちらストライクイーグル。スカイドラゴンと共に行動する。奴らには借りがあるからな」
そんな発言と共にＭｉｇ－２１、ミラージュ２０００Ｄ、Ｆ／Ａ－１８スーパーホーネット、ＹＡ－１０の四機が駆け抜けた。
「敵増援艦隊から艦載機発艦を確認！。大規模だぞ」
「こちら８４９２飛行隊。これより敵イージス艦隊を撃破する。」
「グラーバク飛行隊か！」

「こちらウォードック隊。電子戦機の八割を撃破。８４９２飛行隊を遊撃する！」
「２時の方向から散弾ミサイルと巡航ミサイル接近！！」
「マジかよ！」
「着弾まで残り５分！」
「こちら相模ＨＱ！。どうやら奴らは囮かもしれないぞ！。君達から南々西方面から超規模艦隊を確認した！」
「マジかよ。数は？」
「絶望的だ。２８０億隻だ」
「んな！、無茶苦茶だぜそれ！」
「まったくだ、絶望的過ぎるだろ」
「とにかく、最善を尽くせ。」
「まったく、やってられないぜ」
「イタリア南部から超高エネルギー反応の発射を確認！！」
スカイ・アイがそう言った直後、空から尋常じゃないレーザーが潜水艦隊と増援艦隊、ミサイルすらも一瞬で飲み込んだ。
「なっ！」
「こちら８４９２飛行隊！、何が起きたんだ！？」
「マジかよ。ピンポイントで味方にレーザーが当たらないなんて」
「こちら、イタリア国所属研究実験基地、アルカノイド。試射がてら創製軍に叩き込んだが、良かったか？」
「「「とんでもない。むしろもっとやれ」」」
「了解した。国民に国家計画停電を発令し、全発電所の全電力と国外電線からこの基地に回しているから、次の射撃は一分半後だ」
「んな馬鹿な！！。あんな兵器を隠し持ってやがったのか！！」
「イタリア近海に味方は？！」
「居るか！！。今まで開戦直後に終了してた国だぞ！？。焦土と化しまくってた国！！。わかるわけないだろ！！、馬鹿野郎！！」
「よーし、全艦、対艦ミサイル、特殊弾頭ミサイルを発射しろ！！。目標は敵第二次増援艦隊だ！！。奴らに仕返しをしろ！！」

誰かがそう言うや否や、イージス駆逐艦、巡洋艦、巡洋戦艦、イージス戦艦の後部と前部から多数のミサイルが尾を引きながら飛び出した。それも絶え間無く。
「高エネルギー反応が接近！！。それも絶え間無くだ！。まるで台風だ！！」
「ふざけんな！、超々距離対空ミサイル、ＳＡＭ、ＲＡＭ、ＣＩＷＳ、主砲、対空パルスを撃て！！。近付けさせるな！！」
創製軍側から一気に段幕が放たれた。また、彼等の艦はかなり未来なフォルムだか、ステルス性を投げ捨てた変わりに火力に力を加えたようだ。
「ウィルヘル艦隊、射撃を開始！」
相模の軍司令部からそう言ったと共に青い光とミサイル、緑色や赤色、あまつさえ黒色のレーザー等を一気に段幕で放った。
「敵空中艦隊射撃を開始！！。」
「電磁防壁を作動させろー！」
「間に合いません！！」
「総員対ショック体制を取れ！！」
そう言った直後、レーザーや青い光が創製軍の艦隊に当たった。レーザーを喰らった艦は当たった部分から溶解し、あっという間に弾薬庫、又は機関室に当たり轟沈していった。青い光を喰らった艦は残骸すら残さず轟沈した。
「前衛の第９８６２艦隊が九割壊滅！！、その後衛の第１５艦隊が半壊しました！！」
「なんだあの艦隊は！！化け物か！！」
「こちら、デルタスカイ。全軍、作戦を続行せよ。それが我々の使命だ」
「解っている」
「そうか。だが、なぜこれだけこの世界が長く保って居るかは解らないが、我々はやらなければいかん」
「ああ。次元世界の完全調和のために！。全軍、攻撃開始！！」

超規模艦隊の創製軍から毎分５００ｍｍの嵐の如く砲撃とミサイル等が放たれ、大日本、アメリカ、国連軍、ウィルヘル連合艦隊に降り注いだ。
「緊急回避！！。対ショック体制を取れ！！」
誰かがそう言った。その直後、艦隊が急速に稼動し細かく蛇行を行い、ＣＩＷＳやＲＡＭ、ＳＡＭ等を放ちながらミサイルを撃ち落とし、砲弾から回避をした。だがそれでも当たってしまう艦も居る。
「こちら軽空母水蓮（スイレン）！。被弾、大破した！、一時後退する！」
「対艦ミサイルの中に対空ミサイルが混じっているぞ！」
「ブレイク！！、ブレイク！！、ブレイク！！」
「駄目だ、回避しきれない！」
「こちら戦艦氷鶴（ヒョウガク）！！。艦橋に被弾！、被害甚大！！。これより後退する！」
「敵艦隊から散弾ミサイルが撃たれたぞ！！」
「軽巡川内被弾！、轟沈！。」
「マジか！？。艦載式も有るのかよ、クソッタレ！！」
「このままだと、やられるぞ！！」
「こちら重巡雫！、大破した！！。後退する！」
「散弾ミサイル、着弾まで残り三分！」
「カップ麺が作れるな」
「御託はいい。とにかく今は回避を優先しろ！！」
「こちら空母紅鶴（コウガク）！！。甲板が損傷、大破した！！。応急修理のため後退する！！」
「直撃弾多数！。押してます！！」
「この期に畳み掛けろ！！」
次々と舞い込む情報。それらが交差し、一体なんの情報なのかが解らなくなり始めている。
「かなりヤバいぞ」
「イタリアから超高エネルギー反応！。第二波、来るぞ！！」
空中管制機がそう言った。その直後、空から尋常じゃない光と共に

レーザーが創製軍艦隊に当たったが、電磁防壁と思わしき緑色の壁が出た。が、それはわずか1秒足らずで突破され、光が艦隊を飲み込んだ。
「前衛艦隊消滅！！」
「なん……だと……！？。」
数秒ほどで光が消えた。後に残っていたのは殆どが溶解し、沈没寸前の艦が多数出来上がっていた。
「ほう、かなり残ったな。だが、放置しても大丈夫だろう」
「アルカノイド！、今のは一体なんだ！。説明してくれ！」
「国内の発電所全部と国外電線、各研究所の予備発電所から回したんですよ。それだと最大瞬間放出エネルギーが８６００垓ｋｗで、回りにも影響が出ると思いまして、太陽系の惑星重力圏を利用して当てました。しかし、幾分かが原形が残っているのが凄いですね。もう少し研究してみますか。」
「ふざけるな！！何が大丈夫だだよ！電磁防壁を貫通するなんて聞いてないぞ！」
「こちらウイング。作戦本部から撤退命令が出た。帰還せよ。」
「……了解。全軍、これより帰還する。撤退戦だ！！」
創成軍艦隊はその場で百八十度回答し、撤退を始めた。
「敵艦隊、撤退を確認。」
「シークレット回線から連絡。天皇陛下からの命令です。戦力に余力のある艦隊は創成軍艦隊を追撃、戦力を削ぎ落とせとのこと！」
「しかたない、か。全艦に通達。この戦争に精神論は無きに等しい。あるのは死ぬか、生きるか、だ！。戦闘可能な艦は追撃するぞ！。それ以外の艦は基地に撤退しろ！！」
「敵艦隊が再編して追撃してきました！！」
「砲撃開始！」
誰かがそういった。轟音とともに数多の砲弾が放たれ、創成軍艦隊に飲み込まれた。爆音と鉄が軋む音、悲鳴が無線を通し、響き渡った。

「ふぅ、何度も聞いていれば、慣れてしまうものだな」
「普通なら、慣れてはいけないものですけどね」
「虚数空間を開けろ！。そこから離脱するぞ！」
「了解！」
誰かがそう叫んだ。すると、創成軍艦隊の前が急速的に歪み、突如として不可思議な色合いの空間が現れた。創成軍はその中に入って行き、中心の巨大な艦艇が入っていこうとしたが、突如として艦尾、右舷から数十本の水柱が上がった。
「旗艦エルドラゴン被弾！。機関、舵損傷！！、移動不能！」
巨大な艦艇は勢いが殆ど無かったため、あっという間に泊まってしまった。
「誰が敵艦をやった！」
「こちらニコライ・カプルーノフ！。本艦が敵旗艦と思わしき艦を攻撃した！」
「こちら、スカイ・アイ。カプルーノフ、よくやった」
「旗艦がやられたぞ！！」
「作戦本部から新たな命令伝達。航行不能の艦は廃棄せよ。尚、旗艦も例外無く航行不能なら廃棄。とのことだ」
「仲間を見捨てろってことかよ！」
「これは命令だ。指示に従え！」
「くそが！」
創成軍艦隊の六割が不可思議な色合いの空間に入って行った。だが、四割は航行が出来ない艦隊を残し、不可思議な色合いの空間は閉じた。
「ふぅ。全艦に連絡。ＭＡＷＥＣＬＳを解除。余力のある艦はこのあと周辺警戒。無い場合は基地へ帰還せよ。」
「「「「了解」」」」
高雄以下９６６隻が創成軍残存艦の周辺警戒をし、４３４隻が基地

に戻って行った。

「何とか、なったな。」

暁は力を抜き、椅子に寄り掛かりながらそう言い、その横に座っていた副官は頷き、言った。

「そう、ですね。」

そこに居たブリッジクルーも同じように椅子に寄り掛かった。

何が何だかまったく以って解らない。これ常識　ｂｙ　チルノ（後書き）

どうしてこうなった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8030q/

魔法少女リリカルなのは……なのか？

2011年10月8日16時52分発行